

卷頭言

〈特集〉

COVID-19 以後におけるフィールドワークの（不）可能性
——“されどわれらが日々”のフィールドワーク

Special Issue :

The (im) possibility of fieldwork after COVID-19

本特集は、立命館大学・人文科学研究所重点プロジェクト「グローバル化とアジアの地域」主催のもと、2021年3月20日（土）に実施された研究会「COVID-19時代におけるフィールドワークの（不）可能性——されどわれらが日々のフィールドワークは可能か？」をきっかけに組まれたものである。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大によって、フィールドワーカーは、大きな問いを突きつけられることになった。それは、「フィールドとはいったい何か」「フィールドワーカーとは誰のことをいうのか」「フィールドワークとはいかなる行為なのか」「フィールドワークによって私たちはいかなる経験を得ようとしているのか」「フィールドワークで何が認識されようとしているのか」等といった問いである。そこで本特集では、フィールドワークそのものが、現在、突きつけられている問いを探究したいと考えた。

寺山修司が1967年に『書を捨てよ、町へ出よう』という書を刊行した四半世紀後、佐藤郁哉はそのタイトルを意識しながら、社会学の領域から「書をもって、街へ出よう」を副題とする『フィールドワーク』（新曜社）という書物を1992年に出版した。同書は、フィールドワークを行う研究者たちに大きなインパクトをあたえ、当時大学院生であった私も無我夢中で読みふけたことをおぼえている。

そこからさらに約四半世紀のときを経過して、私たちは新型コロナウイルス

ス感染症 (COVID-19) が感染拡大する状況に直面するに至った。そうした時代にあつて、「書をもって、街へ出よう」というフィールドワークのあり方をあらためてラディカルに問い直していく必要があるのではないか。佐藤の著書『フィールドワーク』の副題が「書をもって、街へ出よう」だとするならば、私たちは、寺山と同時代の1964年に出版された柴田翔の小説『されどわれらが日々』(文春文庫)のタイトルを意識しながら、新型コロナウイルス感染症の時代だからこそあり得る「されどわれらが日々」のフィールドワーク」を模索しようではないか。

では、「されどわれらが日々」のフィールドワーク」は、いかなるものなのか。このことに関連して、本特集に収められた諸論稿では、フィールドワーク経験において考察すべき「能動性／受動性／中動性」「自己変容」「フィールドワーク／フォトグラファー／ツーリストの相互陥入性」の問題、オンライン・フィールドワークにおける「表領域／裏領域」「体験の位相」の問題等が縦横無尽に論じられている。

— —

まず遠藤論文「風に吹かれて——中動態としてのフィールドワークによる『新しい実在論』」においては、フィールドワークとはいったい、いかなる行為なのかをあらためて考え直している。ここでは、これまでは当然のように、フィールドワーカーが能動的に見たり聞いたり体感したりする行為によって、地域をとらえることができるとしてきたフィールドワークという行為が中動的な行為に他ならないと述べている。そのうえでフィールドワークによって開示されるフィールドの実在 (reality) がいかなる特徴を有するものであるのかについて、マルクス・ガブリエル「新しい実在論」に関する議論を補助線として、リヴァプールの「ミュージック・ツーリズム」に関する筆者のフィールドワークの事例もふまえながら議論を展開している。

石野論文「〈居合う〉構えからはじまる——フィールドワークの受動性・偶発性・拡張性をめぐる小論」では、フィールドワークを捉えなおすために二つの点を提示している。ひとつは、フィールドワークの本質的な一要素として、受動性に特徴づけられた〈居合う〉構えが見いだされるという点であり、もうひとつは、フィールドワークが他の研究活動や調査者の生活と潜在的に結びついたものであるという点である。これらの点について考察したうえで、①フィールドワークが他者に対する関係性の一つの帰結であり特定の構えであること、②それが「現地に行くことができない」という現在のなフィールドワーク状況を肯定的に捉えかえすための理論的な可能性を内に秘めていることを主張している。

橋本論文「フィールドワーカーの人類学——歩くことをめぐって」では、フィールドワーク（＝参与観察）が人類学的な鍛錬であり、フィールドの人々とともに「歩く」ことで成し遂げられると指摘する。人類学者ティム・インゴルドが言うように、この人類学的鍛錬は、観察によって素材に関わり、知覚を研ぎ澄ませることの中にある。その意味で、人類学は、誰かとともに研究し、そこから学ぶことであり、人生の道を前に進み、その過程で「生成変化」をもたらすものであると主張する。フィールドでは世界内でのあり様一すなわち家屋内での身の置き方から地面や空気の感じ方、裸足での大地の歩き方、食物の摂り方が変容すると指摘したうえで、筆者は、フィールドにいる自分とホームにいる自分を常に往還しながら「生成変化」するフィールドワーカーのあり様について人類学的な考察を展開する。

藤巻論文「〈追想〉あるマレーシア研究者のフィールド経験——ジオグラファー×フォトグラファーの『語り』」では、マレーシアにおける筆者自身のフィールド経験を回顧しつつ、「リアルなフィールドワーク」の意義を再確認するとともに、フィールドワークおよびフィールドワーカーとは何であり、どのようなものであるべきかを自省的に捉えなおそうとしている。そして、調査地（フィールド）では、観察やインタビュー調査など身体を使った

さまざまな仕事（ワーク）が求められるが、そこで体感し獲得したく身体知を内実化するべく、フィールドのコンテクストをふまえて行われてきた写真撮影が重要であったと指摘し、筆者がフィールドワーカーとして、ジオグラファーでもあり、同時にフォトグラファーでもあり続けてきたことの意味について議論を行っている、

須藤論文「観光とフィールドワークのパフォーマンス——COVID-19における移動危機から見えてくる観光研究とフィールドワークの同型性についての試論」では、COVID-19による移動の制限が、観光経験のあり方を変えたばかりでなく、フィールドワークのあり方も変えたことを指摘するとともに、両者の変容には同型性があり、相互に入れ子状になっていると主張する。現代の観光は観光客の参与を促しつつ、視覚のみではなく五感を使った経験の過程、すなわちパフォーマンスを重視するものになっている。フィールドワークもまた、対象を客観的、傍観者的に観察するのではなく、また対象の行為者が共有する主観を研究者の解釈枠組みに無理矢理押し込むのではなく、対象の行為者の主観に分け入って、それを共有しつつ解釈を試みる実践を重視するものと理解されている。その観点から COVID-19 以後において、一方では観光とフィールドワーク両者における異文化世界の経験の豊穡さが減じられる道程が、他方では近接して類似した同種文化を「異化」し新たな視点を発見する実践への道程が見えてくると主張する。

山本論文「フィールドワーク的観光の可能性——親密性をめぐる一試論」では、新型コロナウイルス感染症の時代において求められる観光のあり方に寄与するものとして、「フィールドワーク的観光」を主張し検討している。新型コロナウイルス感染症以前にはオーバーツーリズムとも称され、局所的に観光地に負荷をかける観光現象が多く見られたり、世界遺産を始めとした観光地の増大により目的地となる地域の格差も拡大していた。そうした中、新型コロナウイルス感染症の時代の社会変化を契機として、適正な観光に向けた観光変革が論じられている。とくに強く主張されるのはゲスト側（ツーリ

スト)の変革である。その変革に寄与しうるものとして大学における観光教育を位置づけ、「観光学」や「観光現象に関わる人文・社会科学」で重視され方法や理念が様々に蓄積されてきたフィールドワークに着目していく。

渡部論文「COVID19の影響によるフィールドワークの再定位とオンライン調査の可能性——『現場の不在』に伴う Zoom 調査の事例から」では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況のもとで需要を集めるオンライン交流会やオンラインツアーの事例研究を通じて、フィールドワークの意義を再定位し、オンライン・フィールドワークの限界と可能性を明らかにしている。その際、オンラインのフィールドワークが必然的に「高度に精緻化された表領域」を成していると同時に、他方で Zoom や SNS によるオンラインが「プライベートな裏領域」をつくることもあることが明らかにする。こうした考察を通じて、①企画者側が実際に視聴者に見せたいものを提示する「主催者側の政治性」や「高度に精緻化された表領域」を通じて、新型コロナウイルス感染症の時代を生きる人びとを調査することが可能となると同時に、②「プライベートな裏領域」—たとえばオンラインでのインタビューによる個人のライフヒストリー—に深く切り込めるのだと指摘する。

葉師寺論文「観光研究におけるネットノグラフィー調査の可能性」では、ネットノグラフィー (Netnography) の定義・特徴・実施手法や利点と問題点などが紹介される。ネットノグラフィーとは、ソーシャルメディア上に映し出される人々の文化的経験をエスノグラフィーやその他の質的研究の手法を応用して理解しようとする研究手法であり、オンライン上の痕跡、相互作用 (オンラインユーザー間の交流)、社会性に重点を置くものである。ソーシャルメディア空間には、観光者の旅行体験に対するパフォーマンス的な語りや表現があふれている。それは観光 (者) を深く理解するための貴重なデータでもある。その貴重なデータを読み解く手段がネットノグラフィーなのである。

間中論文「ボランティアツーリズムのオンライン化は誰を資するのか——

コロナ禍における海外ボランティアから問う『フィールド』の含意』では、新型コロナウイルス感染の感染拡大とそれに伴う移動制限を受け、観光業者の中には、移動を伴わないオンラインツアーを企画する動きが見られることをふまえて、こうしたオンライン化が、ボランティアツーリズムに与える影響について考察している。そのことを通じ、ボランティアツーリズムにおいて「フィールド」が内包するものについて検討することを目指している。その結果、フィールドを「過程の場」として捉えるゲストと「結果の場」と捉えるブローカーでは、「フィールドへ赴く」ことのオンライン化が与える影響に差異があり、特に前者にとっては、フィールドの再現性という点で大きな課題を抱えていることを明らかにしている。

最後に、松本論文「YouTube 動画による『旅の体験』の共有コンテンツ／プラットフォームとしてのその役割」では、YouTube のコンテンツ／プラットフォームとしてのあり方に着眼しながら、具体的な分析の題材として、旅行系ユーチューバーとして活躍する「おのだ /Onoda」、[Sam Chui]、[the Luxury Travel Expert] によるチャンネルをとりあげ、そのうえで、YouTube 動画がいかにして「旅の体験」をシェアするための回路になりえているのかについて考察している。近年、YouTube は動画共有のプラットフォームとして存在感を増しつつあるが、そのなかでも、旅や観光を題材とする動画は大ジャンルを形成しているといっても過言ではない。それらの動画のうち多くは、旅のプロセス全体、もしくはその一部を映像として切り取ることにより、視聴者に対して旅のイメージを提示するものとなっているのである。

ぜひ、以上の力作の数々をご一読頂きたい。

そうして次には、読者の方々から、「“されどわれらが日々”のフィールドワーク」に関する応答を積極的に頂戴し、さらに一層、活発な議論が巻き起こってくれるなら嬉しい限りである。

2021 年 10 月

立命館大学文学部教授・人文科学研究所所長
遠藤 英樹

